様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　２２　年　４　月　１６　日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５２００７７
研究課題名（和文）〈暴力〉の社会思想史的研究
―ゲヴァルト／ヴァイオレンスの二分法を超えて
研究課題名（英文）A Study on Social Philosophy of Violence
: Beyond Dichotomy between Gewalt and Violence

研究代表者
上野　成利（UENO NARITOSHI）
神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授
研究者番号：１０２５２５１１

研究代表者の専門分野：社会思想史
科研費の分科・細目：哲学・社会思想史
キーワード：暴力、ミメーシス、批判理論、社会哲学

１．研究計画の概要
本研究は、ゲヴァルト（主体の支配・統御に関わる暴力）とヴァイオレンス（主体の統御を超えてほとばしる暴力）という〈暴力〉の二つの側面に着目し、この両者がどのように絡み合っているのかを検討するものである。

２．研究の進捗状況
（１）一年目は主に、ゲヴァルトを軸とした暴力論、とりわけＣ・シュミットの「主権」概念とＧ・アガンベンによるその解釈の検討に重点を置いた。シュミットが分析したように「主権」とは人間の包摂／排除を遂行する審級であり、「政治的なもの」はこうした「主権権力」によって規定される。これがアガンベンの議論の要諦である。しかし本年度の研究によって確認できたのは、シュミットのテクストそのものは多層的な解釈の幅をもっており、かならずしもアガンベンの図式にすっきり収まるものではないが、同時にアガンベンのような解釈を強く呼び込む側面をもはらんでいる、ということである。
（２）二年目は主に、「主権」論を真っ向から批判するＡ・ネグリ／Ｍ・ハートの議論を検討の俎上に載せた。ネグリらによれば、グローバル化が加速して「主権」の枠組みが揺らぐとともに、マルチチュード（雑多な人間の群れ）の存在が前景化するようになるという。ところがネグリらは一方で、今度は新たに「グローバルな主権」としての「帝国」が成立するとし、「主権」概念をみずから引き受けてしまう。ここにはある種の理論的な混乱が認められる。ここで重要なのは、グローバル化と「主権」概念とは互いに矛盾するわけではないという点である。むしろ「主権」はそれほどまでに深くわれわれの社会理解に根を下ろしているということが、あらためて問題となってくるといえる。
（３）三年目はこれまでの作業をふまえて、あらためてＣ・シュミットの「主権」概念に立ち戻り、その問題性を検討した。シュミットは「政治的なもの」の核心には「闘争」があるとみていた。そうした「闘争」は原理的には「社会」のさまざまな水準で生じうる。ところがシュミットは「闘争」の場面を「主権国家」間に限定してしまう。このように「闘争」の場面を「社会」から放逐した点に、彼の議論の大きな問題がある。本研究としてはむしろ、あらためて「社会」の場面に視線を向け、ヴァイオレンスの次元の闘争から主権的な政治空間がいかに成立するかという問いを考えたい。これが次年度に持ち越された課題となる。

３．現在までの達成度
③やや遅れている
（理由）
当初の計画ではゲヴァルトにかんする議論、ヴァイオレンスにかんする議論をそれぞれ広く渉猟し、そのうえで最終的に両者の交錯する場面を検討の俎上に載せることを企図していた。しかし当初の目論見どおりに研究

が順調に進捗しているとは言い難い。ゲヴァルトにかんする議論（とりわけＣ・シュミットの主権論）の検討に大きな労力が割かれてきたのがこれまでのところである。一方シュミット論については一定程度進捗し、その成果の一端を論文にまとめることができた（共著図書の一部として出版社には原稿を提出済み。近刊予定）。

４．今後の研究の推進方策

これまでの作業をふまえて、最終年度にはホルクハイマー／アドルノ『啓蒙の弁証法』の分析を軸にしながら、ヴァイオレンスとゲヴァルトの交錯に研究の重点を置きたい。そのプロセスで、ヴァイオレンスにかんする最も重要な議論の一つとして、フロイトの議論を検討の俎上に載せることになるだろう。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計２件）

① 井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス９―政治・権力・公共性』（世界思想社、近刊予定）、＊執筆分担：上野成利「３　友と敵―Ｃ・シュミット『政治的なものの概念』」（頁数未定）

② 市野川容孝・小森陽一編『思考のフロンティア―壊れゆく世界と時代の課題』（岩波書店、2009 年 3 月）、＊執筆分担：「第三章　暴力と自由のあいだ--近代の主権パラダイムをどう超えるのか」、上野成利「基調報告」97～101 頁、上野成利・市野川容孝・小森陽一・杉田敦「討論」102～143 頁